

暮らしのかわらばん 一期一会

今号のいろいろ

★ 曹洞宗 道元物語（前編）

★ 三代相論とは？

営業時間は午前9時～午後6時30分
(営業時間外でもご遠慮無くご連絡下さい)

平成24年・4

道元（承陽大師）号

国産仏壇と会津漆位牌の専門店
築山 佛心堂

TEL 0745-23-8911

(高田川築山信号北角)

(店舗まえに広い駐車スペースあります)

(歳時) 春在枝頭己十分 (はるは しとうにあつて すでにじゅうぶん) 載益 (たいえき)

宋代の詩人載益の「春を探る」の一節です、春は身近にありて遠く迄探しに行く事はない！

曹洞宗 宗祖 承陽大師道元・常齋大師瑩山 ・ 經典 般若心経・法華経・金剛経 ・ 本尊 釈迦牟尼仏
お唱え 南無釈迦牟尼仏 ・ 本山 永平寺・總持寺

開祖がお二人おられるのは わが国の仏教の歴史上非常に珍しい事です。道元を高祖・瑩山を太祖と称しています。承陽大師道元は正治二年（1200）年に京都で生を受けました。三歳で父親を八歳で母親を亡くし貴族への道を捨て十三歳のとき比叡山で出家・得度し天台座主公円の元で仏教の研鑽に勤めましたが、その後比叡山を去り建仁寺の栄西に参禅しました。

建仁寺では栄西の高弟である明全に師事し、そして中国へ渡り天童山景德寺で禅を本格的に学びましたが、仏教界の権力闘争や世俗権力との癒着などに失望と嫌気がさし帰国を考えたりしましたが、景德寺住職の如浄との運命的な出会いもあり一心に坐禅に没頭し、師の言葉である（参禅は心身解脱なるべし）により突然の如く悟りを得て、二十八歳の時客死した明全の遺骨を胸に抱き共に帰国の途につきました。

帰国した道元は曹洞宗立宗の書とも言われる（普勧坐禅儀）を著し、京都深草に興聖寺を建立し本格的な教化活動を始め、曹洞宗の教えである「禅風」を説きました。

しかし仏教界の圧力と興聖寺の焼失が重なった事もあり、教化拠点を越前（福井県）に移し大仏寺（今の永平寺）を開き、多くの弟子の養成に力をそそぎ禅の教えを深めると同時に、文の法語が（正法眼蔵）と云う大書を完成させて近代・現代の思想にまで大きな影響を与えています。

だがこの道元も病に侵され療養の為、京都に帰りましたが建長五年八月二十八日弟子たちの懸命なる祈念もむなしく五十四歳にして示寂しました。

道元示寂後、およそ五十年間にわたって宗門内の対立があり、開祖道元の遺風を受け継ごうとする保守派と改革派との対立が表面化、四代目瑩山に至るまでの軋轢を（三代相論）と云います。

道元の入寂後弟子の懷奘（えじょう）が永平寺住職を継承し、二祖となりました。当時は道元帰国後の直弟子と興聖寺建立後に日本達磨宗より道元に帰依した弟子達と二流あり懷奘はその人格からか両派をまとめ対立が表面化させることなく、道元の遺風を守りながら永平寺の整備にあたり徹通義介を中国に留学させる等二祖としての実績を重ねました。

懷奘が退位を決意したのち、三代の椅子を巡り改革推進論者の義介と、道元の遺風を遵守派の義演の対立が表面化しましたが、義介に軍配が上がり永平寺・曹洞宗三世を継承しましたが、急進的な改革に異を唱える者が続出し退任せざるを得ませんでした。結果懷奘が再任し急場をしのぎましたが弘安三年入寂する事になってしまい、紆余曲折はありましたが懷奘の遺志でもあり義介が再び永平寺の山門をくぐる事となりました。

義介は融和政策を打ち出し反対派との「すり合わせ」を試みましたが、一度崩れた関係の修復には至らず七年後には下山し加賀の大乗寺に身を移しました。この結果道元の法灯は二派に分かれたのです。その後義演が永平寺の住職に着きましたが対立による疲弊を修復するに至りませんでした。寺勢の衰退もあり退任、義演が入寂し義雲が継承しましたが永平寺の歴代住職として義介の名を数とするか否かで論争の火が上がりましたが、結局「三世は認め中興の敬称は削除」という「玉虫色」で決着しましたが、義介が永平寺歴代住職として認知されたのは江戸時代後期でした。

今回は「瑩山さん」や、その他曹洞宗のいろいろを考えています 乞うご期待！

（築山佛心堂）のブログ配信中！パソコン・携帯から（築山佛心堂）でお楽しみ下さい（ご意見も大歓迎です）